

労農連帯こそ動労千葉勝利の力

「本部」暴力集団の歴史の偽造許さず 更に三里塚・ジェット闘争を貫徹しよう

三月三〇日、地本臨大―新生動労千葉結成大会以降、「本部」暴力集団の動労千葉への攻撃は、「財政的にもたない」「社会的に認められない」「徒党集団というデマで塗りかためたキャンペーンをはってきている。このことは、「本部」暴力集団の路線の正義性が全くなく、この間動労千葉の団結の前に一人の組合員も獲得できなかったことの裏返し表現である。あせりかられた「本部」暴力集団は、あろうことか「動労千葉が三里塚・ジェット闘争を裏切った」なる言い古されたデマ宣伝を再び開始してきた。われわれは、五月三十一日、第二回臨時大会を開催する。その時期を捉えて、われわれと暴力集団との争点であったこの対決点を今一度鮮明にしていきたい。なぜならば、この対決点の中にわれわれの正義性と彼らの不正義性、裏切り性が最も鮮明に浮きほりにされているからである。

労働者の責務にかけて決起

三里塚・ジェット闘争！

三里塚・ジェット闘争とは何であつたのかふりかえってみよう。

そもそも三里塚空港とは何か―支配の側が軍事的観点も含めて一方的に持ちこんできたところであり、支配生存のためには農民、地域住民はどうなつてもよいというドス黒い攻撃であり、農民、地域住民にとって生活と命に関わる問題であつたということ。

科学的整合性が全くなく、空港を造ることにより、住民の生活が破壊されようとするとき、労働者としてどのような立場でこれに答えてゆくのかとするべく問われたのである。加えて、ずさんなパイプライン計画の破産によってジェット燃料貨車輸送問題がわれわれの直接的課題となり、そのことを通じて要員合理化、運転保安の問題も多く発生した。

当然、われわれは、「三里塚・ジェット闘争」に決起したのである。われわれは、この三里塚・ジェット闘争を闘う理念（結集軸Ⅱ路線）を「四つの視点と二つの戦略」によって規定づけ、闘ってきた。

●二つの戦略Ⅱ(1)自己の主体の強化、(2)広範かつ重層的な支援連帯の環の拡大。

●四つの視点Ⅱ(1)労農連帯(2)運転保安確立(3)反合理化(4)組織防衛・強化

われわれは、第九四回定期中委（一九七六年一月一七日）の決議をかきりに、水上大会方針をもつて動労全体の闘いへと押し上げていった。大会方針を踏襲し、第一に計画の発表、第二に工事着工、第三に輸送開始を中心の一四〇〇総決起で闘い抜いた。生産点に依拠し七七年一月三日より一〇〇日間闘争を頂点とする闘いは、日本労働運動の戦闘的再生への突破口を切り開いたといえる。

「本部」暴力集団のジェット闘争への裏切り！

この過程から「本部」暴力集団は、露骨にジェ

ット闘争の裏切りを開始してきた。当該地本が全く知らない中でジェット燃料輸送の「ディーゼル機関車が、タンク貨車が、次いで全国より助役機関士（動労組合員を命令させ）が送りこまれた。

これに対し、千葉地本の特認要求をことごとく圧殺してきた「本部」の重圧をはねのけつつ、独力で創意をこらし、佐倉、成田支部を拠点に連日総決起し、権力の弾圧をねかえし闘い抜いたのである。われわれの闘いに、こともあろうに、当局、権力と一体となって「千葉地本に血を流させる」という超反動的闘争圧殺をしてきたのは、他ならぬ「本部」暴力集団ではなかったのか！このことは水上大会方針を放棄し、背後から闘う労働者に銃口を向けることであり、第三四回全国大会で「一線を画する」なる方針が出されてから裏切りが開始されたのではないことをわれわれははっきりいっておこう。

こうした苦闘の中で、一スラストをもつて新たな闘い、助役機関士の手からハンドルを奪い返し、動労千葉一四〇〇組合員の手でジェット燃料貨車輸送を阻止してゆくことが労働者本来の闘いと位置付け、それを貫徹すべく闘う三里塚反対同盟を始め、広範な支援の環を創出し「動労千葉は鉄道を武器に」「農民は土地を武器に」闘うという真の労農連帯がかちとられた。これが三里塚・ジェット闘争であり、一三年間にわたる三里塚反対同盟農民との共闘の上に築かれた三里塚・ジェット闘争の歴史である。

更に闘い抜こう！

今や「本部」暴力集団こそが、一貫した「三里塚・ジェット闘争の裏切り」Ⅱ国鉄当局の先兵をつとめた敵対者であることは明白である。

この三里塚・ジェット闘争に対しセクト的、反労働者的な悪罵を投げつけ、動労千葉破壊を企む輩を絶対に許さず、ジェット闘争貫徹、二期工事阻止に向け労農連帯の旗のもと断乎闘い抜いてゆこう。